

それを見て、まず頭の中に浮かんだものは「綺麗だ」というありきたりで、しかし目の前の光景をこれ以上ない程真つ当に、形容できる言葉だったと思う。

ただ、それ以上に。疑問と謎を感じさせるような、不可解な光景でもあった。

「どうしたのです？鳩が豆鉄砲喰らったような顔して、変なお方」

僕にそんな顔をさせている原因は、自身の事を棚に上げ、どこか妖艶な笑みをその美しいかんばせに浮かべながら宣った。しかしそいつが言う事も最もだろう、と頭の冷静な部分でぼんやりと考えている自分も存在するし、実際その通りなのだ。

驚愕。啞然。今の僕の表情を一言で表すならば、きっとそんな言葉がお似合いなのだろう。

くだいようだが、僕の眼前に広がっている光景は、理解の範疇を超えた代物なのであって。

断じて、僕の感性の方が奇妙なものとして扱われるべきではなく、おかしいのはそちらの方なのだ、と、声を大にして言いたいところである。

だってそうだろう。僕の目の前に現れたそいつは、誰もが見惚れるような美貌を携えた彼女は、宙に浮遊していたのだから。

「なあ、知ってるか？この町の七不思議」

日頃から僕と友人としてつるんでくれている同級生の四ツ谷直仁によって、唐突に投げ掛けられた問いに、僕は答える。

場所は生徒たちの喧騒で溢れかえった賑やかな教室：ではなく、すっかり僕と直仁の間だけのお馴染みの場と化した、学校の屋上に繋がる人気がない階段。勿論周りには僕達以外の存在は見受けられないため、この場には男子生徒一人分と、女子生徒一人分の声しか響かない。

僕は階段の下から二段目に、直仁は踊り場によっこらせ、と呟きながら腰を下ろし、お互いにそれぞれの昼食を膝の上に広げた。

「知らないよ七不思議なんて。そんな事より、君さっきの授業眠りこけてただろ。今度のテストで赤点取ったらヤバインじゃなかったのか？」

「まあまあいいから、サ。取り敢えず聞くだけ聞けって」

直仁は僕の忠告も何処吹く風といった様子で、構わずに「町の七不思議」とやらの話を続けるつもりらしい。今日のこいつの話は、長くなりそうだな。

「町の七不思議って：普通、七不思議なんて学校の専売特許みたいなものでしょ」

取り敢えず話を聴いてみる事にした僕は、まずは真つ当な疑問をぶつけてみる事にした。僕の率直な疑問を受けた当の本人である直仁は、舌を鳴らしながら人差し指をリズムカルに左右に振る。ドラマの登場人物にでもなったつもりなのだろうか。

「そうでもないんだなァ、この町に限っては、サ」

直仁は形のいい目を三日月型に変形させ、ニヤリ、と歪ませた口から常の3倍程は軽薄さを乗せた声色で、僕へそう言い放つ。この町に限っては、と言うが、どういう事なのだろうか？僕は生まれてからこの町でずっと育ってきたのだが、そんな話は耳にした事がない。

僕がそうやって疑念に囚われ少しの間だけ黙り込むと、その思いが顔に出ていたのだろう、直仁はより一層笑みを深め話を続ける。

「お、気になる？気になっちゃうウ？」

「い、いや別にそういうわけじゃ…」

「うんうん分かるよその気持ち。じゃあ早速概要とはいかがかア」

しまった。こいつの与太話の前で表情に感情を出すのは悪手である事は、今まで散々学んできた筈だったのに。僕は自身の失態に心中で舌打ちをした。

「町の七不思議ってのはその名の通り、この町に潜む七つの不思議：謂わば怪異の事だな。」

真夜中の駅の裏手に現れる口裂け女。存在しない路線バス。透明人間の殺人鬼。エトセトラ…。その内の一つに、興味深いもんがあったな。」

直仁はまるで舞台上の狂言回しかのように、どこかわざとらしい語り口調でペラペラと喋る。

「気になるもの……？」

「そ。なんでも、遭遇した人間の願い事を何でも叶えてくれるんだと。が、しかし、その代わりに一つ…代償を払わせる。その人物にとって、命よりも大切な、ネ」

なんというか、随分とベタな噂だなあ。と、つい零れそうになった言葉を――

「なんというか、随分とベタな噂だなあ。」

嚙下する事は出来ず、口からポロリと零れてしまった。

「ははッ、言うねエ。でもま、言いたい事は分かるよ、ウン。すっかりこれがまた、単なる噂話ってわけでもなさげなんだよな」

直仁の妙に含みを持たせた言い方に、僕は首を傾げる。

「なんだよ？もしかして目撃者の証言でもあるのかい？言っとくけど、そういうのは信じないぞ。どうせ何かの見間違いとかだろ」

「いいや、そんなんじゃないよ…最近さ、この町で起きてる異変、お前も知ってるだろ？」

僕は口を噤む。直仁の言及する、「この町の異変」に心当たりがあったからだ。

僕がそうして言葉を発せずにいる間にも、彼は語り続ける。

「2ヶ月ぐらい前から多発してる失踪事件。あれの被害者が口を揃えてこう証言したそうだ。」

――白光姫はうつくしかった。

事の発端は今から約2ヶ月前である。突如として、失踪事件が多発した。

短期間に多くの人が行方を晦ませたこの出来事は瞬く間にこの町に広まり、住人達によって世間話の恰好のネタとされ、憶測が憶測を呼び、果ては怪人の仕業か？などと馬鹿馬鹿しい噂に発展しようか、というその時

に、彼等は帰ってきた。しかし、彼等はどうに彼等ではなくなっていたのだ。ある者は廃人同然と化し、ある者は支離滅裂で無意味な言葉を吐き出しながら他人を傷つけるようになった。

そうして町が不穏な雰囲気包まれ、不安に駆られた人々の安っぽい噂がしきりに囁かれるようになったのは、それだけが理由ではなく。ここまですべてこの話をご清聴いただいた方々にはもう察しがついているだろう。

そう、「白光姫」だ。

被害者達は、「白光姫はうつくしかった」と、うわ言のように喃語を繰り返す事を、支離滅裂な言語を狂い悶えながら叫び散らす事をピタリとやめたかと思えば、皆一様にその言葉を繰り返して吹き始め、また暫くすると元の状態に戻る、という循環を辿るのだそうだ。

直仁曰くその「白光姫」が町の七不思議のひとつであり、その中でも最強、いや「最恐」の存在なのだそうだが。

「…白光姫なら僕も知ってるよ。町の伝承として今もお語り継がれてるわけだし。なんでそれが七不思議になってるわけ？」

そう、白光姫とはこの町で伝承として今なお語り継がれている伝説で、公民館なんかには白光姫の銅像が飾られていたりする。ちなみに、読み方は「びゃっこうひ」。

僕が小学生の頃に行われた「町の歴史を知らう〜白光姫伝説〜」という名目の遠征授業でその内容を七十代程のご老人である館長に聞かされた内容は多少うる覚えではあるが、記憶の中に残っている。

曰く、その昔飢饉に喘いでいたこの土地に、一人の女がふらりと訪れた。女は、老若男女問わずに誰しもが見惚れるような美しきかんばせと、五尺八寸（百七十六センチ）程の高い身長に、その時代には珍しい、輝く光沢を持つさらりとした銀の髪を携えており、村人達からの好奇の目に晒される事となる。

しかし女はそんな村人達からの視線などを気にする素振りも見せずに、飢えに苦しみ倒れ伏していた一人の村人に目をつけた。女は膝が汚れる事も厭わずに村人の傍で屈み、手を翳した。すると不思議な事に、その村人

は見る見るうちに回復していき、立てずにいたのが嘘のように良好な健康状態となったのだ。

そうして女は不思議な力を使いながら村人達を治療し、壊滅状態であった農作物をもその力で復活させ、村は以前の活気を取り戻した。村の長は女に礼をしようと思ったが、いつの間にか姿を消しており村の男を総動員して捜索したが、終ぞ女が見つかる事はなかった。

村人達はせめて彼女が我々を救ってくれたという事実を風化させない為にと、輝く銀髪を持つ女を「白光姫」と呼び、彼女の存在を伝承として残す事を決意した。

と、いう話が僕が聞かされた白光姫伝説だった筈だ。それがいったいどうして、町の七不思議として、現代の都市伝説として扱われているのだろうか？

「どうしてその白光姫が町の七不思議のうち一つとして君臨してるのか：その辺はちょっと分かんないけど、兎に角これで分かっただろ？この噂はただの噂、で片づけていいようもないじゃない」

直仁の顔からはいつの間にか楽しくて仕方のないさそうなにやけ面が消え失せており、声音も先程までのどこか軽薄なものから、真剣味を帯びた声へと変化していた。

僕はいよいよ、そんなバカな、だとか、想像力が遅しいな、だとか、そんなありきたりな否定の言葉でさえも口にできなくなっていた。

「お前もさア、いい加減ちつとは向き合った方がいいよ」

普段の僕であれば、そこまで言われてもまだ何かしら反論していたのだろうと思う。

「お前の気持ちも分かるよ」

でも、今は。今、僕が置かれている状況下では、そんな言葉さえも口からひねり出す事が難しく感じられて。

「でも、いつまでも後ろ向いててもしょうがねエと思うし…この噂に賭けてみるのも価値はがあると、俺は思うぜ」

だって、僕は知っているから。本当にそうなってしまった人間が存在する

事を。知っているくせに、知らんぷりをしていたから。

「お前の妹：千恵子ちゃん、まだ元に戻らねえんだろ」

ある日突然、身近な人間が白光姫によって狂ってしまう事を、知っているから。

三週間前、妹の千恵子が狂った。いや、もしかしたら消息を絶った2ヶ月前、あの時から狂ってしまったのかもしれない。

突然行方知らずとなったあの時の事はよく覚えている。僕も両親も、それはそれは酷い憔悴具合だったとは、誰の談だったか。そこはよく覚えていない。搜索願を提出し、警察による大規模な搜索活動が行われたが、一向に千恵子の発見に繋がる気配はなく、無情にも時間だけが過ぎていくばかりだった。

が、しかし。そうして絶望に打ちひしがれていた僕達の前に、妹はあっさりと姿を現したのだ。僕達は勿論喜んだし、警察も長い間消息不明であった妹が帰還した事を知り、安堵した様子だった。それが、つい三週間前の事。

だが、千恵子は千恵子でなくなっていた。

帰ってきた千恵子は虚ろな目をしていて、一言も言葉を発する事もせず、どこか遠くをぼうつと見つめるだけの、人形のような存在と成り果ててしまっていた。

勿論、呼吸はしている。心臓も脈を打っている。だが、ただそれだけ。食事を差し出しても手をつける様子は全く見せないし、懸命に声をかけても反応する素振りも見せてくれない。かと思えば、突然手負いの獣の如く暴れ出し、僕や両親に危害を加えかけたり。

精神病院にも足繫く通院した。しかし、一向に状態が好調になる気配はなく、このままでは同じ屋根の下に住む家族である僕達の身の安全も保障できないとの事だったので、千恵子には措置入院が下されたのだ。

そして、現在。僕は夜の公園に一人佇んでいた。

ここでまた、時を少しだけ遡り直仁から町の七不思議、ひいては白光姫の

情報を仕入れた件の昼休みへと戻る。正に藁にも縋る思いでその白光姫の更なる噂を聞いてみる事にした。

僕が恥を忍んで白光姫について詳しく聞かせてくれ、と頼むと直仁はこちらに真つすぐな視線を寄越していた瞳をまたにんまり、といった具合に変貌させ、声に孕ませていた剣呑さも霧散しており、いつもの彼へと戻った様子で。なんだかこの友人に色々なものを見透かされているような気分に陥り、居心地の悪さを覚えた僕はなんとなく少し身じろいだ。

「いやア、やっぱりお前なら関心を寄せてくれると思っていたよ！」

「うるさいなあいいからはよ話さんかい情報を」

僕が恥ずかしさを誤魔化すように半ば早口になってそう急かすと、直仁はこほん、とわざとらしく咳払いを一つして、白光姫についての語りを再開した。

「さっきも言った通り、白光姫ってのはとっても大切なものを差し出させる代わりに願いを叶えてくれる存在だと云われてるんだ。」

「そうらしいね。それで？そのとっても大切なものについての具体例なんかはないの？」

僕その問いかけに、直仁は一度頷き、回答を口にする。

「まア、単刀直入に言うると、心だね」

やはり、と言うべきか。僕の予想通りの答えが直仁から帰ってくる。今まで失踪し、そして元いた場所へと戻ってきた被害者たちは、心までは完全に戻ってきはしなかった。

同時多発的な失踪事件が本当に白光姫の仕業であるならば、おそらく標的となった彼等から奪ったものは健全な精神、もとい「心」なのだろうと僕は踏んでいたのだ。

「正確に言えば、思い出だとか大切な人やものに関する記憶だとか色々云われてんだけど：結局のところ精神的にはぼイカれちゃってるわけだから、心そのものとして言及してくね」

少々面倒くさそうに直仁は言い、話を進める。

「そして、肝心の白光姫とはどうしたら遭えるのかっていうと、何かしらの悩みを抱えてる人なんかを主なターゲットにするらしいんだよね」

「そりやまたベタな…ん？ちょっと待て。だとすると、千恵子は何か親にも僕にも言えないような悩みを抱えてたのか…？」

なんてことだ。妹一人の苦しみにも気づいてやれていなかったのか僕は。姉として不甲斐ない事この上ない。

妹の苦悩を分かってやれなかった事を悔いている僕を見ながら、直仁はいや、と呟き訂正の言葉を続ける。

「正直これに関しては条件なんてあつてないようなもんだと思つてもいいよ」

「は？どういう事なの？」

直仁から伝えられた情報に僕は困惑した。標的となりやすい人物の特徴を語っていたのに、そんなものはないように思つていいとは、いったいどういう事なのか。

「だつてさア、よく考えてもみなよ。悩みなんて大なり小なり誰でも抱えていると思うぜ？それこそ千恵子チャンだつて、テストの点数が悪かったとか、忘れ物して怒られちゃったとか、そんな小さなものだったかもしれないよ？」

彼の言葉に僕は瞠目する。たしかにその通りだと思つたからだ。僕だつて全く悩みがないと言えば嘘になるし、目の前の友人だつてついこの間はお通じが悪いかも、と零していたし、そういえば千恵子もテストが上手くやれなくて、お母さんに怒られるかもと嘆いていたな、と僕は思い出す。

ということとは、つまり。

「実質、ほとんどの人間が標的になり得る…つてわけか」

「そーゆーこと。だから千恵子チャンが一人で悩みを抱えてたのカモーとか、兄としての懸念はしなくてもいいけど、被害者数が増加する可能性についての懸念は欠かさないでいた方がいい…つてのが、俺の推測かな」

なるほど、と僕は一人納得する。悩みの種の大きさを問わないのであれば、人間なんて格好の的というわけだ。それは正しく彼の言う通り、狙われる条件などあつてないようなもの。ほぼ無差別に等しいと言つても過言ではないだろう。

「それで、どうするの？」

「え？どうするって…」

唐突に直仁から要領を得ない質問をされる。気づけば彼の顔は先程の真剣な表情に様変わりしていた。そのまま直仁は言葉が続ける。

「噂だといっても実際に被害に遭った人達から白光姫の名前が出てるんだ。お前も二の舞を演じる事になっちまうかもしれない」

「…ああ」

「それでも、千恵子チャンを助けるかい？」

常に張り付けているニヒルな笑みが掻き消えた顔で、友人は問う。

「そんなの、最初から決まっている。僕は――」

「助けるに、決まってるだろ」

僕の答えを聞き、彼は、友人は、直仁は。

いつもの食えない笑みではなく、年相応の無邪気な笑顔を見せた。

直仁の考案した作戦はこうだ。

日が落ちた頃に、中央公園に一人きりで滞在する。その間、僕はさも悩み事に頭を抱えているような素振りを見せ、落ち込んでいるフリをする。と
うだけの、至ってシンプルなもの。

勿論、本当に僕一人だけというわけではない。スマートフォンを直仁との通話を繋げたままの状態にしておくのだ。

『メーデーメーデー、そっちの状況はどうだい？』

「あー、まあ…特に異常はないな」

僕はスマートフォンで通話ツールで連絡を取りながらベンチに腰掛ける。

時刻は八時九分。門限や両親に無駄な心配をかける事に対しての懸念を取り払う為、友達（直仁）の家に外泊するという旨を予め伝えている。

しかし、と僕は両親たちへの思いから思考を軌道修正し、現状を改めて観察する。

「白光姫どころか、全く人を見ないね…」

『前はランニング中のお兄さんとか、犬に散歩させてやってるマダムとか、色んな人がいたんだけどねェ。ここ最近の失踪事件でめっきりこんな時間帯に外に出てる人は見なくなっただけもんなア』

そうなのだ。もともとこの中央公園は直仁が述べたように、ランニング中であつたり散歩中であつたりと様々な通行人がちらほら見受けられていたのだが、最近では例の失踪事件のせいで夜間の外出を警戒されるようになり、そういった人々を全くと言っていい程に見かけなくなったのだ。

そこでふと、僕の脳内にある一つの疑問が生じる。

「ねえ、一つ聞いてもいい？」

『ん？なんだい？』

「いや、僕がもしこの案に乗らなかつたら、やっぱり君一人でやってたのか？」

当初は直仁が公園で白光姫をおびき寄せる作戦だったのだが、僕の身内の問題なので僕がその役割を買って出る事にした。

『あー、いや、俺だけじゃ意味ないとか…うーん…』

僕の質問に対して口ごもり、適切な言葉を探しながら試行錯誤している気配を、電話越しに感じ取る。直仁にしては非常に珍しい事だ。この男はいつも他人を見透かしたような態度で飄々としているような、どこか掴み所のない人間だ。そんな直仁がこうして言い淀むなんて、珍しい事もあるものだな…と、僕が少しばかりの驚きと、膨らんだ好奇心に思考を割いていると、視界の端にちらりと何か、白いものを捉えたような気がした。僕は咄嗟にその方向へ視線を向ける。すると、そこには。

何も、いなかった。

(なんだ…気のせいかな…)

僕は安堵の溜め息を漏らすと同時に、自身が少々ナーバスになっている事を自覚し、行き場のなくなつた気分を紛らわすかのようにがりがり頭を乱雑に掻いた。そこで漸く、自分の手に収まっているスマートフォンからこちらに呼びかけてくる直仁の声に意識が行く。そういえばまだこいつと連絡を取っている最中だったな、とスマートフォンを持つ右手の方に視線を下げて――僕は、凍り付いた。

『直仁』と名前を表示したスマートフォン。それを握りしめる僕の右手。

そして、そしてその向こう側、つまり僕の正面に、足が立っている。その

足は青白くて、生傷がそこかしこ刻まれており、ほとんどの爪は剥がれてその内側の赤黒く変色した肉組織が丸見えになっている。普段ならあまり直視してはいたくないような様相のソレから、僕は目が離せないでいた。相も変わらずスマートフォンからはおい、どうした、返事をしろ、と一向に返事の返ってこない僕の事を心配した友人からの催促の声が聞こえてくる。けれども、やはり僕は目線を足に釘付けにされたままかすれ声すら出せずに動けないでいた。

明らかに普通の人間のものではないであろう足。周囲には誰もおらず、頼れる友人も今は傍にはいない。僕ひとり。

怖い。恐い。こわい。それでも。

妹の顔を思い出す。突然いなくなつて、狂ってしまう前に何度も見せてくれた、澆漑としたあの笑顔を。妹の声を思い出す。突然いなくなつて、狂ってしまう前に何度も聴かせてくれた、お姉ちゃんと僕を呼ぶ、元気がよくて、可愛らしいあの声を。

「……こんな事で、挫折するわけにはいかないよな」

意を決し、僕はゆっくりと顔を上げていく。目に映るのは白い着物。ポロポロで見るに堪えない状態の足とは違い、こちらはなかなかどうして綺麗な純白で、品のある印象を受ける着物だ。

僕はぼんやりと感じた着物の第一印象を頭の片隅に追いやりながら、そのまま目線を上昇させていく。ゆっくり、ゆっくりと視線を足から胴体へと動かしていく、そのまま胸部で動きは止まる。

このまま目線を上げれば、いよいよ顔を目にする事になる。僕は先程覚悟を決めたばかりだというのに、早くもその決意が揺らぎそうになっていた。いや、実際に揺らいでいたと思う。

やはり怖い。どうしたって怖いのだ。僕的心中には目の前に突如として現れた未知の存在に、おそらく怪異だと断定してもいいであろうソレに対する恐怖心が、どうしようもない程溢れ出していた。妹の為に覚悟を決めたのはつい先刻だというのに、もう怖気づいてしまう自分が情けなくて、嫌気が差す。僕がそうしてソレの胸の辺りで目線を止めたまま、顔を上げ

れずに動きを止めてどれくらい経ったのだろうか。いつの間にか直仁との通話は途切れており、不気味な程完全に静かになった公園でソレの顔を見る事が出来ずに固まってしまった僕の耳に、今となっては酷く懐かしく、愛しい声が届いた。

「お姉ちゃん」

それは紛れもなく妹の、千恵子の声だった。僕が散々聴いてきたあの澁刺とした声とは遠い、物静かな声だったけれど、間違いない。これは千恵子の声だ。

だから、油断したのだ。だって、ソレが妹である筈がないのに。そんな事は分かり切っている事の筈なのに。僕はただ、妹の声が聞こえただけで顔を上げてしまった。

「おねえちゃん」

嗚呼、どうしてなんだ。僕は、ただ。

「ややアットオオ」

千恵子を救いたかった、だけなんだ。

「コツチ、ミてくれたネエエエエ」

友人が突然声を発さなくなったあたりから、嫌な予感はしていた。俺が何度も電話越しに声をかけても全く返事を寄越さずに、ただただ荒くなった彼の息遣いだけをこちら側に伝えてくるスマホを睨みつけ、俺は待機場所であった公園から徒歩十五分程のコンビニから全力で駆け出していた。

もしもの事があればあの人が助けに入ってくれる話だった筈だが、どういう事なのか。突如として会話が返ってこなくなり、息遣いが荒くなっていった事を鑑みれば、嫌でもあいつが異常事態に陥ったという事が分かる。「クソツツ：約束すっぽかして救えませんでした、とか……マジ恨むぜ、オイ!!」

やはり俺も傍にいてやればよかっただろうか、と思う。が、すぐにその考えを頭から消し去り、自分が今できる精一杯の事に身体を集中させる事に

した。

「兎に角：ツ無事でいてくれよ!!」

俺に今できる精一杯の事。それは、ただひたすらに中央公園に向かって走る事だ。

今はただ、全力疾走するしかない。彼女を信じて。

「コツチ、ミてくれたネエエエエ」

まるで黒い絵の具で塗り潰されたかのように真っ黒な眼に吸い込まれるようになる、という使い古された表現が、頭を過る。

そこにいたのは当然妹の千恵子などではなかった。その女には、顔面の二分の一を占める程に大きく、そしてドス黒い闇で満たされたかのような眼が存在していた。しかし女の以上とも言える特徴はこれだけに留まらない。眼の下には耳まで裂けたかのように、これまた大きな口を持っていた。口の間から見える、黒く塗られた巨大なガチャ歯たちが恐怖心を煽るその存在感をより一層際立たせている。

そして、そんな不気味な特徴を持った顔の天辺から生えているのは銀髪。と言っても、その銀髪はかなり傷んでおり、腰の辺りまで届く長さの髪は綺麗に伸びてはおらず、ボサボサで光沢は失われており、不潔な印象を抱かせる。

「ウレ、レイうれしいうれしい、ウレしいヨオオオオ」

女の口から漏れ出るかのように聞こえてくるそれは、明らかに千恵子の声なんかではない。まるで幼児のまろい声と、若い女の甘ったるくて高い声と、老人のしゃがれた聴き取り辛い声を、ぐちゃぐちゃに混ぜ合わせて無理矢理創り上げた『声の出来損ない』という表現が似合いそうな、そんな声。その聞いている者を不快にさせるような声で、女はたどたどしく、覚えてたての言葉を連呼するオウムのように喋っている。

「イっしょよ。ズツといっしょよ。ズツトズツトズツト」

声が出せない。息が上手くできない。そのくせ身体は震えている。ただ、喉から漏れる不自然な呼吸音と、きっちり噛み合わずに振動する歯が鳴ら

すガチガチという音が耳に響くのが自分で分かる。

動かなければ。今すぐにでもここから逃げ出さなければ。本能はとつくに警鐘を鳴らしている。

僕は震える足を叱咤して、なんとか逃走を図ろうとする。しかし、情けない程に震える足は地面に縫い付けられてしまったかのように動かない。

「ドウシテコワがるノ？どオシて？」

僕が己の恐怖心に蝕まれ、動けずにいる間にも女はひたり、ひたりとこちらへゆっくり歩み寄ってくる。

嗚呼、もうだめだ。僕はいよいよこの場から逃げ出す事を諦め、目を閉じる。僕はきつとこの女にどこかへ連れ去られ、精神を破壊されるのだろう。

ごめん。母さん、父さん。ごめん。千恵子。

最早念仏を唱える事すら億劫になって、一言も発さずにその時が来る事を覚悟した。

『諦めなきゃ、後悔なんてしないよ！』

その時ふいに、千恵子の声が頭の中に思い起こされる。いつかの日曜日の朝、千恵子に付き合っただけの女児アニメを視聴していた時の事だったか。画面の中で可愛らしくて煌びやかな衣装に身を包んで、敵の怪人と戦いを繰り広げている少女達を応援する妹は、いつもの倍は元気がよかったように思う。三十分程のアニメを見終えた後、興奮冷めやらぬといった様子の千恵子と感想を言い合っていた時だった。

『すごかったねー！やっぱりキュアミサイルはかわいいし強いし、最強だよー!!』

『ええ、そうね。お姉ちゃんはあるおつかない怪人が出たら、腰抜かして逃げちゃうかも』

『えー!?最初から諦めちゃダメだよお姉ちゃん!』

恐怖で凍てついていた脳内に千恵子の言葉が鮮明に再生され、徐々に暖かみを取り戻していく。

『キュアミサイルも言ってたでしょ？諦めなきゃ、後悔なんてしないよ!』

ああ、そうだな千恵子。その通りだよ。今でもお前は苦しんでいるのに、

お兄ちゃんちよつと臆病になってたよ。

気が付けば呼吸は正常になっており、身体の震えも止まっていた。僕は深呼吸を一つして、ゆっくりと目を開ける。女はすぐ目の前まで迫ってきていた。僕よりも高い身長の方はこちらを大きすぎる眼でじっと見下ろしており、大きすぎる口はいい、と吊り上がっている。

不気味な女だな、と思う。しかし先程までこの身を支配していた恐怖はもうこれっぽっちも感じてはいない。

僕が今からやろうとしている事は無謀なだけの愚行なのかもしれない。しかし、ここでただこの女の餌食と化す事を待つだけで、行動を起こさない事の方が余程愚行と言えるだろう。

「カエロウ。還ロウ、オネイチャン。イツショニ——」

「うるせえええええええッ!!」

僕は声を張り上げて、振り上げた拳を衝動のままに女の顔面に叩きつける。顔をモロに殴られた女は、そのまま声にならない悲鳴を上げながら後方へ吹っ飛ぶ。自分でやっておいてなんだが、物理攻撃が効く存在なんだな。

僕はついさっきまでは全く動かなかった二本の足を意気揚々と動かし、倒れている女の元へと向かう。呻き声を漏らす女を眼下に、僕は冷静さの戻った思考回路を回す。さて、ここからコイツをどうするべきか。捕縛するにしてもロープの類などは当然持ち合わせてはいない。では放っておくか? いや、放っておけば犠牲者が増え続けるのは明白だ。やはりここでこの女を完全にどうにかせねばならない。

取り敢えず、もう一発大打撃を与えておくか。と、再度握りしめた拳を振り上げた時だった。がしり、と足首を掴まれる感触。咄嗟に足元に視線を移せば、そこには僕の足首をひっ掴む女の手が確認できた。

(しまった!悠長にしすぎたか!!)

足首に巻き付く女の手を何度も蹴りつけるが、手の力は弱まるどころか増すばかりで徐々に僕の足首を圧迫していく。

蹴ってだめならば手で強引に剥がすしかないな。僕はそう思い女の手を剥がしてやろうと、身を屈めて足元へと顔を近づける。

それがいけなかった。

その途端、女は顔を突然上げたのだ。間近で女の漆黒を閉じ込めたような巨大な眼と目が合った僕は息を呑み、背筋にはぞくり、と戦慄が走る。

「ニガサナイ」

女の口からその言葉が発せられると同時に、僕の周囲に突如として黒い霧のようなものが現れ、取り囲まれる。突然の異常に対応しきれずに同様する僕を女はニタニタと嫌な笑みを浮かべながら、更に顔を近づける。

「ズウツト、イツシヨダヨ」

霧は更に深まる。女に僕の足を掴む手を離す気配は一向にない。僕は必死に足首に巻き付く指をこじ開けようとするが、強固な力で握られておりびくともしない。女の手が悪戦苦闘している間にも霧は濃くなっていく。

ふと、二の腕に違和感を感じた。そちらを垣間見れば、僕の二の腕を上から重なるように手の形をした黒い霧が握っている。

驚愕に瞠目した僕は霧の手を振り払う為に腕を思いきり振り回した。何度も何度も、振り回した。しかし霧は振りほどかれて消え失せるどころか、足首を捕まえている女の手と同様に力を強めていく。僕はじわじわと握力を増していく霧の手に掴まれた二の腕に痛みを覚え、思わず顔を顰める。いや、二の腕だけではない。太腿や腰、果ては首にまで圧迫感を感じ出す。

慌てて自身の身体の状況を確認した僕の目に飛び込んできたのは、身体全体に二の腕同様大量の霧の手が群がっている光景だった。

(クソツッ…ダメなの…!?)

固めた筈の覚悟に罅が入る気配を感じ取る。僕は身体中に巻き付く手の群れを剥がそうと尽力するが力は弱まらず、身体に纏わりつく手の数も増えていくばかり。

たまらず女の顔を思いきり殴りつけてやろうと、数多の手に掴まれて動きを封じられている腕を強引に振り上げ、そのまま拳が顔面へと直撃――は、しなかった。

僕の渾身の一撃は、女に口で受けとめられたのだ。その無駄に大きな口の中に、僕の拳が歯と歯の間に挟まるようにして入り込んでいる。とどのつまり、女に拳を噛みつかれている。

「なっ…!は、離して!!クソツ!!」

当然こんな状況に陥れば誰だって焦るだろう。僕も例に漏れず、急いで拳を口内から引き抜こうとする。しかし、その行為が悪かったのだろう。抜こうとした拳からぐちゅり、と嫌悪感を煽る音が聞こえる。

「痛アツ…!？」

直後に走るは、激痛。拳からは真っ赤な血が流れ出ているのが見える。

どうやら女には強力な握力だけでなく、強力な顎の力まで具えられていたらしい。

苦痛に歪んだ僕の顔を見た女は笑みをより一層深め、拳を噛む顎に力を集中させる。僕の拳はみしみしと音を立てながら軋み、流れる血も更に多くなり、それに伴い痛みも増す。僕は最早抵抗する余力も尽きてきて、地面に膝を着いてしまう。

嗚呼、今度こそ本当にダメみたいだ。抵抗をやめた僕の身体に嘲笑うかのように絡みついてくる手は、益々増えていく。まるで身体全てを圧迫されているかのように錯覚し——ある意味錯覚ではないかもしれないが——僕は息苦しさを覚える。しかしそんな事はもうどうでもよかった。

嗚呼、嗚呼。悔しいなあ、畜生。あんなに息巻いて、絶対に千恵子を助けるつもりだったのに。結局はこの女、おそらく白光姫にあっさり敗北してしまっなんて。

(：ほんと、どこまでも姉失格ね)

妹も助ける事ができずに、自分も妹と、白光姫の餌食となってしまうた被害者達と同じ末路を辿ってしまうのだろう。木乃伊取りが木乃伊になるとは正にこの事だ。

残された母さんと父さんは、どう思うだろう。子供が二人とも失踪したうえに狂わされてしまうのだから、きっと心中穏やかではいられないと思う。

(泣かせちゃうかなあ…：ほんとにごめんなさい、母さん、父さん)

僕が妹と両親へ対する懺悔をしている間にも、周りの霧は濃くなり、手の群れは数を増し、僕を覆い尽くすかのように纏わりついてくる。そしていよいよ、黒い手が視界を覆い何も見えなくなった。その直後。

光が、僕の視覚を刺激した。目は霧の手に覆われているにも関わらずである。白い、白い光だ。白い光が黒い霧でできた手を貫通して、僕の目へと灯を与えてくる。

「グアアアアアアアアア!!」

視界を塞がれている僕の耳に、女の断末魔が届く。事態の急転換に僕は戸惑いながらもめを開く。いつの間にか目を塞いでいた手は、僕の身体を拘束していた手達は見る影もなく消えていた。目を開いた僕の眼前には変わらず女の顔があった。しかし視界を奪われる前に見た顔と一つ、相違点がある。あんなに醜悪な笑みを浮かべていた女の顔は、苦痛に歪まされていた。

もう僕を縛る手は消滅したというのに、状況が上手く理解できない僕はその場でただ呆けた面を晒しながら立ち尽くすしかなかった。

「もし。そのあなた」

女の声だ。今僕の目の前で悶え苦しんでいる女の醜い化け物のようなものとは決して比較にもならない、美しく妖艶な、聴覚に優しい声。僕は咄嗟に周囲を見回すが、人の姿は見当たらない。

「そちらではありませんよ。上、上を御覧なさい」

声は上から聞こえた。もしか、ジャングルジムの頂上からこちらを見下ろしているのだろうか、とか、そんな場違いな程に呑気な考えが頭に浮かぶ。それもきつと、この声を聴いたせいなのだろう。兎に角、そんな思考を断ち切るようにかぶりを振り、声の聞こえた方——即ち、頭上を見上げる。

そして、僕はやはりその考えが笑ってしまいう程、本当に呑気なものであった事を思い知る。

コンビニから全速力で駆け、漸く中央公園へと到着した俺がまず目にしたのは、宙に浮かぶあの人を見上げて啞然としている友人の姿だった。そしてその足元にはこの件の怪異であろう女が汚い悲鳴を上げながらのたち回っている。

「……どうなってんだ、コリヤ……」

思わず漏れ出た俺の言葉は浮いている彼女の耳に届いたようで、こちらを振り向いた彼女の美しい目と俺の目がばちりと合う。

「おや、直仁クン…来たのですか」

「ええ、まア。あんた、俺との契約をすっかり忘れてんじゃないかって思っ
てね…。ま、きちんと覚えてもらってみたいで何よりですケド」

「酷いですねえ。私わたくしの事、信用しておられないのですか？」

よく言うぜ。今までも何度か契約を忘れかけてたくせに。

しかし本当にどういう状況なのだろうか、これは。俺が軽く困惑していると、先の会話で気を取り直したらしい友人が俺と彼女の間に何度も目線を往復させる。その目線には俺以上に当惑しているのであろう色がありませんと感じ取れる。気持ちは分かるぞ、友人よ。

「な、直仁…!?ていうか、え…!?お知り合い!?」

「あー…いや、まア、うん。取り敢えず落ち着いて」

既知の間柄である俺が現れた事で幾分か冷静な思考を取り戻したのであろう友人は、それでもまだ取り乱した様相で疑問を矢継早に投げつけてくる。

「ああ、うん…て、落ち着けるかあ!!なんなんだこの人!?!宙に浮いてるし、発光してるし、なんか妖艶だし…何?この…何!?!」

前言撤回。まだあまり冷静にはなり切れていないようだ。

俺は取り敢えず友人を落ち着かせる事を諦め、彼女にとある確認を取る事にした。

「それで?コイツが、今回の失踪事件の元凶って事でいいんですよね?」

「ええ、ええ。そうですよ。私のフリをしてよからぬ事を企んでいたようですが。まったく、童のままごと遊びにも劣る真似事です。こんな醜悪な出来映えで、私の名を騙ろうだなんて…お笑い種にもなっておりませんわ」

そう言うと、彼女の顔からはそれまで湛えていた微笑が失せる。代わりに浮かばせたのは心底不愉快で仕方がないというような表情。それは、見る者全てが心の臓をぎゅっと握りつぶされるような感覚に陥り、息を一つ

する事すら憚らせるような、そんな冷淡なものだった。

その場の空気がまるで凍り付いたように冷え、俺の頬に汗が一筋流れ落ちる。勿論それは冷や汗だ。場を完全に支配した彼女は、ゆっくりと下降していき、地面に降り立つ。そのまま友人の元、否、友人の足元に蹲っているソレへと歩を進める。ゆったりとした歩みすら、彼女の美しさを引き立てる材料と化しているようだが、今この場においては潰されそうな程の威圧感をひしひしと感じさせる所作にも見えた。

ゆっくりと、一步一步を踏みしめるように歩み、ソレ：怪異との距離を縮めていく。俺も友人も、意を唱える事もせずただ黙ってその様子を見届ける。この状態の彼女にはなるべく口を挟まない方が吉なのだ。それに、彼女が直々に手を下してくれるのであれば、余計な手間も省けて楽ちんである。

さて、そんな事をぼんやりと考えていれば、彼女の歩みは遂に怪異の元へと到達したようだ。

「不愉快ですわ、全く持って。そんな醜い容貌でよくもまあ、この私の猿真似だなんて愚行に及ぼうと思いましたがね。私これでも、自分の顔には自信がありますのよ？」

彼女はしゃがむ事もせず、その場で直立している。こちらに背を向けているので表情は窺えないが、顔も下げていないところを見るに、わざわざ見下ろす事もせずに視線だけを眼下の怪異に向けているのだろう。怪異は顔を上げる事も儘ならないようで、先程からずっと両の腕で頭を抱えて地面に伏したまま遠目に見ても分かる程に戦慄している。数多くの人々を狂わせた凶悪な怪異とはいえ、なんだか可哀想に思えてきた。

「面を上げよ」

凜とした声。しかしその声には明白な怒気と冷徹さを多分に含まれており、自身に対して放たれたわけではないにも関わらず、黙って様子を窺っていた友人は背をびしり、と伸ばし身体を硬直させた。かくゆう俺も、背中が少し粟立つのを覚えたわけなのだが。まったく、いつになっても彼女の怒りを浴びるのは慣れないものだ。

その感情を乗せた声を直接向けられた怪異は、一瞬びくりと身体を跳ね

させた後に恐る恐るといった様子で顔を上げる。シユメール人も斯くやという程巨大な瞳には彼女に対する恐怖心が色濃く浮かんでおり、これまた巨大な口は屈辱に歪められていて、口内からは荒い息が絶えまなく吐き出されている。全体的に、アンバランスな造形の表情だ。それを造り出した原因である彼女は、怒りに表情を歪ませていても顔面の美しさが損なわれないのだが。世界は斯くも残酷である。

彼女の声が続く。

「私の名を騙ろうというあなたのその据わった肝は評価してあげましょう。ついでにそのおめでたい頭も。まったく大したものですよ」

最早その評価は怪異に恐怖を上乗せする効果を的確に届けるだけの文言だった。怪異の身体はより一層震えを増し、その異様な造形の顔をぐしゃぐしゃに歪ませる。

恐怖、そして絶望だ。今、あの怪異は恐怖と絶望、その二つだけに支配されている。

先程まではきつと、友人がそうなっていたのだろう。友人だけではない。被害に遭った人々も、連れ去られる瞬間の心情など、察するに余りある。多くの人を恐怖と絶望に陥れておいて、自分の存在が脅かされれば一丁前に彼等と同じ情を抱くとは、随分と情けない奴だな。

「ですから私直々に：引導を渡してさしあげましょうか」

そう告げた彼女は右腕を掲げ、そしてそのまま、死刑執行の合図を送るかの如く腕を直下に振り下ろす。

その瞬間、怪異の身体は真っ白な光と共にバラバラに弾け飛んだ。

「しかし、ほんとに驚いたよ。なんだか色々情報過多すぎて未だに僕の中で処理しきれないんだけどな」

場所は僕達がよく屯する屋上へと繋がる階段、ではなく屋上である。人氣の少ない場所とはいえこんな話を万が一にでも誰かに聞かれてもしたら少々面倒なのだそう。そういうわけで僕達は今、誰もいない屋上で話をしている。話題は勿論、先日体験した非日常の世界についてだ。

「あー：ほんと、悪かった。あの怪異に接触する為とはいえ、怖かったよな。実際危険な目に遭わせちまったワケだし：申し訳も立たねエ」

「だから、もういいってば。仕方ない事だよ。他に方法もなかったんだし、失踪事件の元凶である怪異はどうも、無駄に知能が発達していたらしく、自分よりも格上の存在である彼女には存在を匂わせないよう、彼女は勿論だがその周辺にも姿を見せる事は控えていたのだそう。しかしあれだけやりたい放題していたのだから、当然彼女の契約者である直仁にも、その存在は認知される事となった。しかもそれが、彼女の名を騙つての悪行であれば尚の事である。全くもって愚行としか言い様がない。

そう、「彼女の名を騙った」のだ。

「まあ薄々気づいてはいたけど、やっぱりあの人白光姫だったんだな」

彼女——もとい本物の白光姫は今回の騒動を聞きつけ、正義感から事件解決に乗り出した、わけではなく、ただ単純に直仁ととの契約があったからだ。この件についても触れておかねばなるまい。

「それで、白光姫：さんは？まだ家にいるの？」

聞けば直仁は白光姫の子孫なのだそう。といっても、それが判明したのはおよそ4年前の事。元々直仁の実家は由緒正しき家柄ではあったそうだが、怪異退治などを本格的にやっていたわけではない。より正確に言えば二百年程前までは怪異と戦っていた記録もあるにはあるそうなのだが、何せ残っている資料はどれも古いものだし、家の者も誰もそれが真実だとは思わなかったのだとか。そうして単なる由緒正しき家として機能していたのだが、4年前に突如として家に現れ、一言。

「私、あなた方の祖先ですの」

これだけ言い残して去っていき、その後一人暮らしをしている直仁の元にも現れ、またもや自身が直仁の祖先である事を伝え。そのままふらりと行方を晦ませた。勿論その当初は実家も直仁も気の違った女の取るに足らない戯言だと思っていたそうだが、その後日、直仁が怪異に襲われているところを助けられ、その場で契約を結ぶ事に。それ以来、白光姫と共に怪異退治にしばしば赴いているらしい。

と、いうのが二日前に僕が聞かされた話なのだが。余りにも日常からかけ離れた体験をし、余りにも現実離れた話を友人の身の上話として聞かされて、半ばショートを起こしながらもなんとか受け止めた僕の脳を褒めてほしいものだと思う。ちなみに契約とはいったいどんな事をしたのかを聞いてみたが、口を噤み目を伏せられてしまった。どんな契約だったのだろうか。

「ああ、俺の家でグースカ寝てるよ。久々に力使ったから、ちと眠いんだと」

先日の出来事を回顧していた僕は、直仁の返答で現在へと意識を向ける。自分から聞いておいて意識が逸れるとは僕も少し疲れているようだ。

「ふーん…そっか」

「……………」

沈黙が訪れる。何かを離すべきだが、僕は咄嗟には話の種が思いつかなかった。そうして逡巡していれば僕の頭に一つ、伝えるべき事を思い出した。

「…千恵子、明日にはもう退院できるってさ」

あの、良くも悪くも夢のような出来事があった後の事だ。直仁の家に帰り、先述の話を聴いて、その時はおそらくはナシの三割も理解する事ができずに、取り敢えず疲れていたのが泥の様に眠って。その翌日、目を覚ますと両親からの通知の数が溜まりに溜まっていたのでこちらから電話を掛け直せば、妹が、千恵子が元に戻ったのだという報せを受けた。

僕は急いで病院へと向かった。どうやって病院まで行ったのかはよく覚えていないけれども、

『お兄ちゃん』

その声は。暗く澱んだ声ではなく。

その顔は。光を宿す事をやめた瞳と、かさついた唇と肌によって陰鬱な印象を抱かせる顔ではなく。

全てが、僕がよく知る妹、千恵子の姿に他ならなかった。思わず抱きしめてしまった僕を宥める妹の声と、涙を流しながらも静かに見守ってくれていた両親の姿だけが鮮明に記憶に残っている。

元に戻ったのは千恵子だけではない。偽白光姫の毒牙に掛かった被害者

である人々も、個人差はあれど皆徐々に意識を取り戻してきているそうだ。
「…よかったなア」

直仁は嘯み締めるように、まるで自分の事のように嬉しそうな表情を湛えて、そう呟いた。

ここ数日の間に、この友人の知らない顔ばかりを見てきた。しかし僕にとっては、今この瞬間見せたその顔がなんだか最も、新鮮なものに見えた。

「お前、そんな顔もできたんだなあ…」

ぼそり。僕がそう呟くと

「何言ってるの、俺はいつもステキなスマイルでしょ？」

直仁はいつものどこか胡散臭い笑みを張り付け、軽薄な声で宣った。

「んなわけあるか」

僕はその変わり身の早さと、そんな態度でステキなスマイルなどと嘯ける凶太さにあきれて、冷たい声でそう返す。

まるでいつもの日常みたいだな、なんて思う。実際元の日常に戻ってきたのだと思う。しかし、僕はもう知ってしまった。この日常は、怪異という人間を脅かす薄氷の上で存在していた事を。それを密かに狩り、このささやかな日常を守っている存在がいる事実を。

「…：…なあ、」

「ダメだ」

否定、或いは拒絶。いや、そのどちらもか。そんな思いを乗せた言葉に、まるで予知していたかのようなタイミングで決られる。

「ダメだよ、お前は。コツチに来ちゃあダメだ」

嗚呼、またその顔だ。そんな顔、お前には似合っていない。しかし、これこそがおそらく友人の真の顔なのだろう。

本当に、知らない事だらけだ。彼の拒絶の言葉を受け入れれば、僕は恐らく直仁の素顔も、これから先現れる怪異達の事も、知らずに日常へと緩やかに戻っていくのだろう。でも、それはやはり――

「嫌だ」

僕ははっきりと口に出して伝える。この際だ、僕も自分の思いを言葉にして言ってみよう。

「解ってる。命が危険に晒される事なんて多々あるんだろう？自惚れじゃなければ、お前は僕をそんな目に遭わせたくないから、断ってるんだらう？」

直仁は黙ってこちらを見つめる。そうだ、そのまま僕の思いを存分に聴け。「でも僕は、もっと知りたい事があるんだ。怪異は結局なんなのかもよく解ってないし、白光姫の正体も。そんな中途半端な状態で投げ出されても、僕は納得できない。それに……上辺だけじゃない。お前の素顔も、きちんと知ってから、今後も付き合いを続けていきたいんだ」

再び、沈黙。兎に角出し切った。僕の思いなどを諸々ぶつけてやったのだ。今更僕に対しても知らんぷりしようだなんて、通用しないからな。

「…………ハ、参ったねコリヤ。そんなお熱い思いぶつけられたら、返事ははいかYESでしか認められないようなもんだぜ？」
はいかYESか。という事は、つまり。

「いいよ、まア俺が蒔いた種でもあるしな。ただし、安易に戦闘に参加させたりはしない。あくまでも調査員の役割として、だ。それでもいいな？」
直仁の返答に、僕は大きく頷いた。そして、ニヤリとスマイルを湛えてこう言ってるのだ。

「当たり前でしょ。諦めなければ後悔はしないからね」

僕の返答に直仁は、呆れた様な、けれどもやはり彼が時折見せるようになったあの暖か味を持たせた様な溜め息を漏らして、口元に微笑を浮かべた。